外務省 **2006** 年度 **NGO** 活動環境整備支援事業

災害復興に関する **NGO** 研究会

平和教育・紛争予防教育ワークショップ
報告書

Education for Peace and Conflict Prevention Training Workshop

主催：外務省国際協力局民間援助連携室

実施：教育協力 **NGO** ネットワーク **(JNNE)**

2007 年 **3** 月

はじめに

外務省は、日本の NGO の専門的な能力を更に強化するために「NGO 研究会」を毎年立ち上げ、研究会の事務局を請け負う団体と調整しながら活動を進めています。
平成 18 年度は、この「災害復興分野」に加え、「プロテクション（受益者保護）」、「NGO ネットワークのあり方」、「ファンドレイジング」をテーマとした NGO 研究会が各々活動を展開しました。

「災害復興に関する NGO 研究会」では、「教育協力 NGO ネットワーク（JNNE）」のメンバーが中心となり、外国人の専門家を講師として、災害後の教育復興支援の実践に役立つテーマとして、①緊急・復興時の教育援助のミニマム・スタンダード、②コミュニティベースの心のケア、③平和・紛争予防教育を立てて、各々のテーマの専門家をそれぞれ、英国、フィリピン、マレーシアより招き、3 日間の実践的な研修を行いました。研修の内容は、NGO がもつ「ファシリテーターの役割」（人々に、各々の問題を解決するための糸口を示し、自発性を重視して解決の方向に誘導すること）を強調したものが多かったです。

この研究会では、首都圏以外の NGO の方々も参加できるよう、5 名まで交通・宿泊費を負担する等の対応をした他、外務省の ODA ホームページや ODA メールマガジンにもワークショップ開催の案内を掲載し、幅広く参加者を募りました。その結果、各々のワークショップに約 20 名、延べ約 60 名が参加しました。アンケートの結果、役だったと回答した参加者が多く、この研究会の成果が参加者の活動に反映されるものと期待しております。

外務省は、日本の NGO が、開発途上国の人々を支援するための活動に協力するため、NGO 支援無償資金協力による資金援助を行っていますが、教育分野は、保健、水供給等民生分野と並ぶ主要な日本の NGO の活動分野です。

国連ミレニアム目標（MDG）の達成に向けて日本の NGO の果たす役割は大きく、政府としてもできる限りの支援を行う所存です。

2007 年 3 月
外務省国際協力局民間援助連携室長
寒川　富士夫

目　次

ワークショップ概要

プログラム内容

Session 1: Introduction/Ice-breakers, Orientation
(はじめに、アイスブレークとオリエンテーション)
Session 2: Mapping （マッピング）
Session 3: What Response Needed in Post-Disaster Work Short term → Long term
（災害後の活動になにが必要とされるか、短期から長期へ）
Session 4: Focus on Education Programming
（教育プログラムに着目して）
Session 5: Methods of Education Utilized in Post-Disaster Work
（災害後の活動に活用される教育の手法）
Session 6: Communication Methods
（コミュニケーションの手法）
Session 7: Methods of Participatory Facilitation
（参加型ファシリテーションの手法）
Session 8: Communication Skills for Effective Facilitation
（効果的なファシリテーションのためのコミュニケーションスキル）
Session 9: Simulation Exercises 1（シミュレーション 1）
Session10: Simulation Exercises 2（シミュレーション 2）
Session11: Fine Tuning Facilitation（より良いファシリテーションに向けて）
Session12: Summary and Closing（まとめとおわりに）

ワークショップの効果についての質問紙調査の結果

添付資料：講師の発表スライド

ワークショップ概要

１　主　催：外務省
　　実　施：教育協力 NGO ネットワーク（JNNE）
　　後　援：独立行政法人国際協力機構（JICA）
　　事務局：（社）シャンティ国際ボランティア会(SVA)

２　目的と内容

平和教育とは、ユニセフによると、紛争や暴力を防ぎ、紛争を平和的に解決し、平和を創出するような行動の変革をもたらす知識、技術、態度、価値観の促進プロセスと定義されている。停戦・和平合意が成立した後も、民族・グループ間に対立や憎悪感情が残り、居住区の分断、社会における人間関係の崩壊、社会の暴力化等をもたらしていることが多いため、平和教育は和解を社会に浸透させる上で、極めて重要な要素と考えられている。

このワークショップの目的は、以下の 2 点であった。

⑴ 災害復興時のあらゆる分野・セクターの支援事業に平和・紛争予防教育のプログラムを取り入れるための日本の NGO の能力を高めること。

⑵ ワークショップ参加者が、平和・紛争予防教育プログラムのファシリテーターに必要な知識、技能を修得すること。

３　講師

Jerald Joseph、Asian South Pacific Bureau of Adult Education (ASPBAE)の理事として平和・紛争予防教育プログラムをアジア各地で普及している。マレーシア人。Pusat Komunikasi Masyarakat (英語訳：People's Communication Centre)理事。日本、フィリピン、インドネシア、タイ、ケニア等で教育 NGO の能力強化ワークショップのトレーナーとしての活躍した。

４　内容・スケジュール

1 日目　Friday:

Session 1　Introduction / Ice-breakers、Orientation
(はじめに、アイスブレークとオリエンテーション)

Session 2　Mapping Disaster in Asia
（アジアの災害についてマッピング）

Session 3　What response needed in post-disaster work? Short term ? long term
（災害後の活動になにが必要とされるか、短期から長期へ）

Session 4　Focus on Education Programming
（教育プログラムに着目して）

2 日目　Saturday:

Session 5　Methods of Education Utilized in Post-Disaster work
（災害後の活動に活用される教育の手法）

Session 6　Communication Methods
（コミュニケーションの手法）

Session 7　Education that Empowers
（参加型ファシリテーションの手法）
Session 8　Tools for Education
（効果的なファシリテーションのためのコミュニケーションスキル）
3 日目　Sunday
Session 9　Tools for Education（シミュレーション 1）
Session 10　Simulation exercises（シミュレーション 2）
Session 11　Fine tuning Facilitation
（より良いファシリテーションに向けて）
Session 12　Summary and closing（まとめとおわりに）

５　日時、会場

日時：2007 年 1 月 12 日（金）～14 日（日）の 3 日間、9：3０～17：30

会場：独立行政法人　国際協力機構　東京国際センター(JICA 東京)　東京都渋谷区西原 2-49-5

６　参加者対象：

① 国際人道援助・開発協力分野の NGO 職員、役員で研修の成果を所属団体の活動に活かせる方。

②　全日程（3 日間）参加でき、セッションごとに分担する日本語での報告書作成に貢献できる方。

＊本報告書は参加者が分担して記録を作成し、事務局が編集したものである。

Session 1

Introduction/Ice-breakers, Orientation
開会、アイスブレークとオリエンテーション

【ねらい】
１．ワークショップの趣旨を理解する。
２．ファシリテーター、参加者を知り合う。
３．ゲームなどを通し緊張をほぐす。

【内容】
4 部に分けて実施された。

１．ファシリテーターの紹介
ファシリテーター（ジェラルド・ジョセフ氏）の自己紹介。
Asian South Pacific Bureau of Adult Education(ASPBAE)理事でマレーシア人。世界各地でワークショップのトレーナーとして活躍している。

２．**Ice-Break**（５種類のゲーム）
以下のゲームや活動を通して、参加者同士の交流が促された。
・ 台風ゲーム
・ 鶏ゲーム
・ 全員で歌とダンス（RumSumSum）
・ ネームタグの交換
・ さまざまな挨拶

３．自己紹介
参加者一人ずつ、約１～３分間で各自の紹介を行った。

４．ワークショップの説明と参加者の意気込み
まず、ジェラルドから、ファシリテーターとしての心構えについての解説を受けた。ファシリテーターとして大切なのは、参加者を楽しませることである。そのためにはワークショップの参加者をよく知り、良い雰囲気づくりをすることが重要である。そのために Ice-Breaking は大切で、独自の方法を使って、参加者同士の交流を促すのが効果的である。

その後、１．なぜワークショップに参加したのか、２．３ヶ月後までにワークショップでの経験をどう活かすか、について各参加者がポストイットに書き、公示した。多くの参加者がファシリテーターとしてのスキルや平和教育に関する知識を高めたいという希

望を寄せていた。また、三ヵ月後のアクションプランとして、フィールドで活かす、セミナーで利用する、各団体内でシェアする、教育現場で活かす、などの意見が寄せられていた。

これらの意見を統合した結果、ファシリテーターのスキルを今後実践で使えるようなワークショップを実施していくことを全員で再確認し、ワークショップへの導入としてセッション１は終了した。

【コメント】

＊ Ice-Break では様々なゲームでお互いを理解しつつ､緊張をほぐすことができた｡とくに､ワークショップの始まりは緊張のせいか発言も少なく、参加者全体が静かであったが、ゲームを通して活発な発言が始まった。

＊ 自己紹介では、人により紹介内容がまちまちで、多くの人は、自分自身の紹介と団体の活動紹介が混在していた。限られた時間のなかで効率よくお互いの紹介ができるよう、トピックを決めてお互いを紹介しあうのがいいのではないかと思った。

Session 2

Mapping
マッピング

【ねらい】
１．ワークショップ参加者の活動を紹介することで参加者の連帯意識を高める
２．マッピングの手法を訓練する

【内容】
１．ジェラルドが第２セッションの作業方法を指示。質問内容は「私の代表的な活動事例」
①A４サイズの紙を一枚、ピンク・ブルー・イエローの１２×８センチサイズのポストイットを各一枚、マーカー一本を受け取る。
②A４の紙に代表事例を記号化した絵を描くよう指示。
③ピンクにはその活動事例の「成功した側面」を記入。ブルーには「課題・問題点」を記入。イエローには「地域住民（Community Participation）の参加」を記入するよう指示。

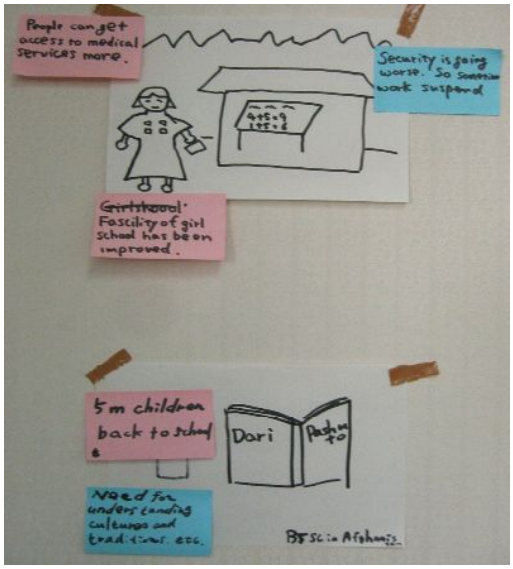
2. 参加者各自が指示内容を作業し、会場横のボードに紙を貼り付け。

3. シェア
ジェラルドと参加者がボードの近くに集まり、一例ずつ参加者が説明を行なう。ジェラルドや他の参加者から都度質問があり、意見交換。

事例１　:「東チモールでのコーヒー園経営」
成功面　：現地住民の意思を優先した経営を行なっており、住民の満足度が高い
課　題　：現地スタッフと国際スタッフの意思の疎通
住民参加：住民の意思を尊重。定期的な委員会の開催

事例 2　:「アフガニスタンの少女の教育・医療向上」
成功面　：平和教育のテキストを作成。医療が向上した
課　題　：女性の参加がまだ十分とはいえない
住民参加：地元住民のコミッティーに参加

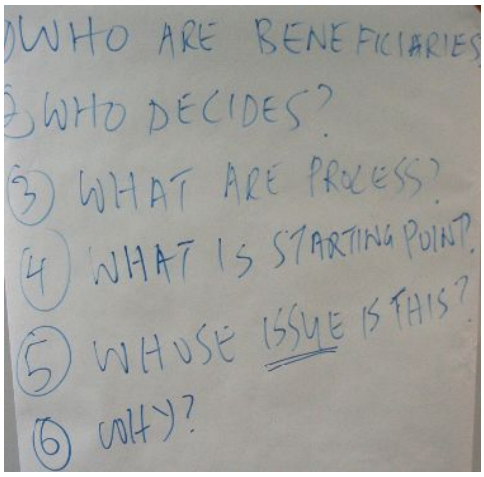
事例 3　「アフガニスタンの女性教育」
成功面　：5 名の少女が学校に行くこととなった
課　題　：少女が家から出ることを好まないその地域の文化にどう対処するか
住民参加：地元住民がボランティアとして活動に参加



4. まとめ

第 3 セッションの時間であるが、25 分間ジョセフ氏が第 2 セッションのまとめを行なう。
事前準備として、休憩中にジョセフ氏がイエローの紙「Community Participation」を内容によってグループ分けを行ない一枚のボードに貼り付け。
ジェラルドから、国際 NGO が現地で活動を行なう場合に地域住民の意思を反映した活動を行なっているか、との質問が投げかけられ、意見交換を行なう。
ジェラルドからの住民参加型の活動に繋がる質問を説明

① 誰がその活動でベネフィットを得るのか？
② 誰が活動を決定するのか？
③ そのプロセスは？
④ 出発点は何か？
⑤ 誰のイッシューなのか？
⑥ なぜ活動を行なう必要があるのか？



【コメント】

一日目の第 1 セッションで自己紹介を行なったとはいえ、この時点で参加者の表情はまだまだ硬かった。この第 2 セッションで各自の活動内容についてマッピングの手法を利用してシェアしたことで、参加者間の連帯感が大幅に向上した。連帯感を醸成したポイントは 3 点。①それぞれの参加者が世界の現場で実際に活動を行なっていることを再認識した。②説明の手法として、上記の手法をとったことで、単に数分程度口頭で説明するよりも活動の中心(成功・課題)に的を絞った情報のシェアが行なわれた。③またシンボリックな絵、色紙を活用することで視覚と右脳に訴

えるわかりやすく、柔らかい情報交換となった。
　これまでもワークショップでマッピングの手法を使用しているが、今回は更に効果的な応用方法を実践することが出来たと実感している。絵を描くことで、意見を導き出すきっかけとすることは、いろいろな場で非常に有効であると深く納得した。

Session 3 What Response Needed in Post-Disaster Work Short term → Long term
災害後の活動になにが必要とされるか、短期から長期へ

【内容】
住民を主体としたプロジェクトを具体的な事例を元にして組み立ててみる。そのなかで、前回のセクションであげたいくつかのポイント（誰が決定者か？どんなプロセスか？誰にとっての問題か？）がどれだけ反映できているかを検討した。

まず参加者全体でミャンマー国内のカレン民族が置かれている状況をビデオで見た。ビデオからは以下の内容がわかった。

ミャンマー東南部では少数民族であるカレン族と国軍の戦闘が続き、多くのカレン族が国内避難民として生活している。カレン族は食糧不足、不衛生な住居、地雷、伝染病、教育機会の不足といったさまざまな問題に直面している。カレン族は殺害されており、女性がレイプされる状況にある。

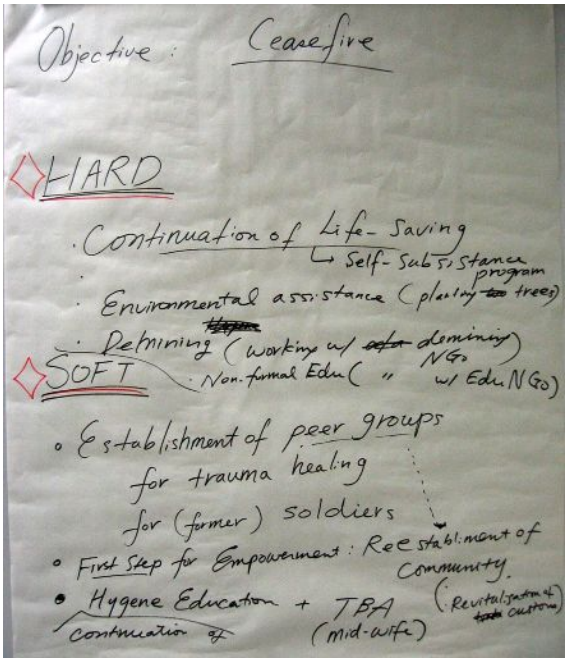
その後３つのグループに分かれ、緊急時、中期、長期でのプロジェクトを作成し、グループ発表をした。

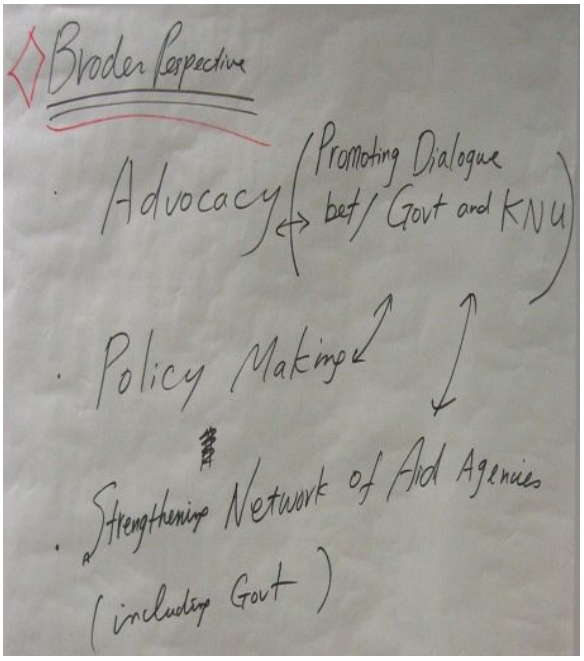
①緊急時のプロジェクト

平和的なエリア、１５０家族を対象に、シェルター供与。食料配布。メンタル・ケアーの活動を行う。また配布のフォーカル・ポイントを設置する。メディアの注目あつめる努力をする。ミャンマー政府ならびカレン族の組織とも交渉を行う。

②中期のプロジェクト（停戦合意をまでの設定）

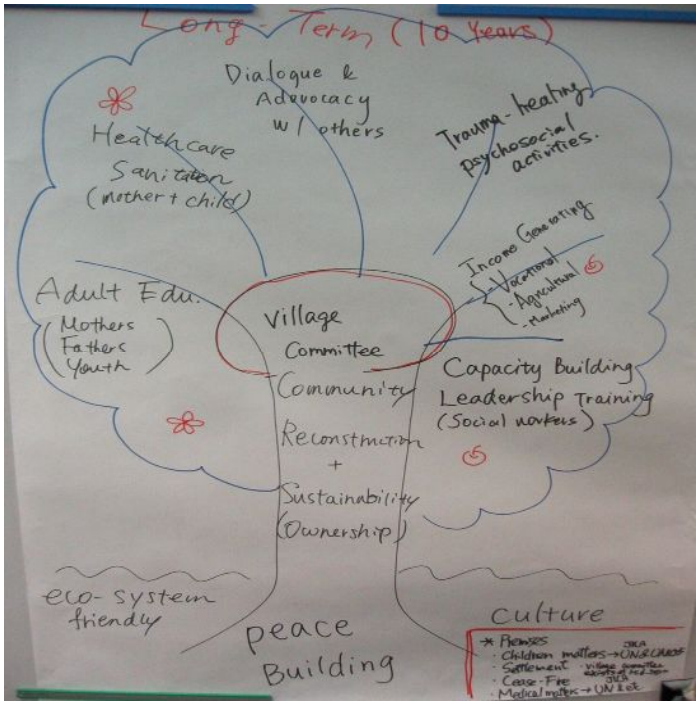
ハード面の支援として、自給自足のための農業支援。植林。地雷撤去。ノンフォーマル教育。ソフト面の支援として、メンタルケアーが必要な人同士のグループ、元兵士同士のグループを設立する。衛生教育や伝統産婆のトレーニング





③長期的なプロジェクト（１０年間）

村委員会を持続性やオーナーシップを考慮し、設立する。活動としては、成人教育、メンタル・ケアー、政策提言、リーダーシップトレーニングなどを行う。



ジェラルドより、以下のコメントがあった。

衛生教育など公衆衛生の問題は国内避難民としての問題なのか？もともとの問題なのか、緊急時における問題なのか分けて考える必要がある。また誰の視点に基づいてプロジェクトを組み立てているか、見直したほうがよいものも含まれている。往々にして NGO 側の視点に基づいたプロジェクト形成が行われる危険性がある。

緊急時でのすでにある組織、リーダーをプロジェクトの中に関わってもらうことが重要で、そうでないとプロジェクトに軌道修正が必要なときに住民の視点、ニーズを急に取り入れようとしても難しい。

NGO の仕事は火が消えかけたことから消えたあとにするプロジェクトであるが、そもそもの火の元（紛争の原因）を見ていく必要があり、開発の仕事と政治的なアジェンダは切り離すことは出来ない。

【コメント】

実際に所属する団体が、緊急時の支援に関わったときに、緊急時のモノの配布だけでなく、そのあと元々その地域の抱える問題へアプローチしなければいけないのではないか？という議論があり、長期復興支援までにはいかないが、1～2 年間の期間で支援した経緯がある。（タイ津波で在タイ移民外国人への支援。パキスタン地震で被災地域へのトイレ設置・衛生教育支援）緊急支援を行いそして、災害前の状態にもどすことだけでいいのか、どうかというジレンマを今でも抱えている。災害等で脆弱な状態になった人々にはこれまでの負の状態が、また違った重みで降りかかってくるのではないかと感じる。ただ、ジョセフの言うように「もともとの問題なのか、緊急時における問題なのか分けて考える必要」を感じる。また、誰の視点での問題なのかということは常に頭に置いておきたい。

開発の仕事と政治的なアジェンダは切り離すことは出来ない。というジェラルドのコメントは意味深かった。自分自身アフガニスタン事業に関わる中、NGO は中立な立場だからこそ、現場に入り人にアプローチできる。しかし、紛争の原因を考慮し、それが改善されない限り、いつまでも紛争が継続し、援助が必要な状況は続くだろう。

Session 4 Focus on Education Programming 教育プログラムに着目して

【ねらい】
教育事業の概要および実施の把握

【内容】
ジェラルドによるとセッション４は講義･1 日目(セッション１-４)の総括にあたるという。なお、セッション４の Education programming の説明がセッション３（What Response needed in post-Disaster Work? Short Term→ Long Term)のグループワークを取り上げているため、本稿では、主にセッション３のグループワークを例にとって述べていきたい。

１．ビデオ：ビルマにおける国内避難民状況
シュミレーション：ＮＧＯ活動における国内避難民支援
ビデオ・グループワークに入る前、Jerald Joseph 氏より、以下の点について注意点があった。
①裨益者はだれか
②誰が（プロジェクトを）決めるか
③どんなプロセスか
④スタートポイントはどこか
⑥これはだれの問題か

２．グループワーク
グループワークでは、上記６つの点を考慮に入れ、各グループで議論されることとなっている。
・グループ１　Short-Term
グループ内の議論では、まず手始めになにを行なうかが議論された④。ビルマ政府に活動における合意書を取りつける、カレン族のリーダーの協力を得るなど、国際ＮＧＯが当地域活動における協力者の選定が行なわれた。それと同時に、①支援対象者はだれかということで、軍、ゲリラ兵（ビデオではなし）、などから直接被害をうけているカレン族ということになった（⑥も含む）。また、shor-term はどのくらいの期間のことをいうのかという議論で 1 年間という意見もでたが、３ヶ月～半年ということになった。そして、何を行なうかについて、１）Peace Area の設置（、２）食料配布、３）医療支援、４）衛生教育（ビルマ住民の衛生知識がどの程度かグループ内では定かではなかったが他の状況と比べて低かった場合、不衛生が致命的な危機に繋がりかねないため）を実施が妥当ではないかということになった。また事業規模（受入世帯）について、期間が３ヶ月～半年ということで、また、グループ内・緊急援助経験者の経験上、１５０世帯の受け入れとなった。

・グループ２　Mid-Term
Mid-Term は、Short-Term の緊急援助的なアスペクトの後に来るということで、開発・復興支援の要素が多く取り出されていた。国内避難民への物資供給に落ち着きがみられ、同避難民の定住を視野にいれ、植林事業、保健・衛生事業・地雷除去事業などが開始されることとなる。また、Mid-Term 後半には、政府軍による同避難民への虐待に対する心のケアなどのソフト面における支援が開始される。

・グループ３　Long Term
Long-Term では、Mid-Term と多少重複する部分があるが、国内避難民の定住を視野にいれ、主にハード面での開発支援事業が実施される。また、避難生活を強いられていた時期に奪われた教育の機会を子どもをふくめ、成人に対しても教育支援を実施していく。さらに、当該カレン族と政府軍の間の和解事業も当時期より開始される。

３．Education Programming

これまで、ビルマ国内避難民・カレン族に対する短期～長期的支援におけるシミュレーションをもとに、当３グループ間で議論してきたが、Jerald Joseph 氏から、Education Programming において、以下の４点の重要性が取り上げられた。

・Welfare Approach
・Development Approach
・Community Based Approach
・Right Based Approach

【コメント】

当セッションは、国内避難民・カレン族に対する短期～長期的支援におけるシミュレーションをもとに、危機的状況下での教育事業は可能なのか、また、その効果的な導入・計画・実施などを考えてきた。政府軍による定住地の破壊および虐待がある危機的な状況では、物資援助が先決になり、当状況では、教育事業の導入は考えられにくい。教育事業の実施には、中・長期的な期間がかかるといえる。その効果的実施には裨益者の福祉向上を念頭に置いた支援が必要であろう。

Session 5 Methods of Education Utilized in Post-Disaster Work
災害後の活動に活用される教育の手法

【テーマ】
コミュニティの組織化における手法

【ねらい】
コミュニティを組織化する上でファシリテーターとして留意すべき点を理解する。

【内容】
最初に、「コミュニティ組織化サイクルフレーム(Community Organizing Cycle Frame)」について例をまじえながら、学んだ。「コミュニティ組織化サイクルフレーム」には以下の６つのプロセスが含まれる：

① Start from the people/コミュニティからのニーズをもとにスタート
② Help them think together/ファシリテーターとしてコミュニティが目標を達成するためにどのようなアプローチを取るのがよいかコミュニティと一緒に考える機会を提供する
③ Achieve a common understanding of the situation/現状に対する共通理解をするための機会（例：週に 1 度の村会議の開催）を提案・提供する
④ Gain new awareness, knowledge, attitudes and so forth/ファシリテーターとコミュニティが双方から学びあうことで、新しい認識やアプローチの発見に繋がる
⑤ New awareness should lead to action/新しい認識や気づきがきっかけとなり、コミュニティが行動にうつすことを促す
⑥ Evaluate actor, plan and further steps/①～⑤までのプロセスを評価し、向上していけるようコミュニティを導いていく

[備考]このサイクルは、基本的に①→②→③→④→⑤→⑥→①とまわっていくが、ケースによっては順序を変えること可能。

[紛争予防というコンテクストでのコミュニティ組織化の成功例(DVD)]

インドネシアのマルク諸島で、1999 年初頭、イスラム-キリスト宗教間の対立が勃発。後に、対立勃発の黒幕はインドネシア国軍であったといわれている（国軍は自分たちの存在意義を再提示するために、宗教間の対立をあおったようだ）が、対立勃発当初は、両者から多数の犠牲がでるという最悪の事態となった。そんな中、マルク諸島南部にあるケイ・アイランドでは、10 年越しの現地 NGO による双方のコミュニティ組織化活動の蓄積のおかげで、犠牲者がほとんどでずに対立を食い止めることができ、また、双方のコミュニティの和解が早い段階で行われた。対立勃発後、同地域で 10 年近く活動していた現地 NGO の助けも奏をこうして、双方のコミュニティに組織されたチームが手分けして、国内避難民への支援（食糧配布、医療支援、仮住居の手配）を実施。緊急時がおさまるとすぐに、既存の Cultural Council(モスリム・クリスチャン協議会)が中心となって、ケイ・アイランドの古くから伝わる和解のための伝統的な慣習、つまり、モスリム・クリスチャン双方の村をきれいな衣装を身にまとってダンスをしたり歌をしながら訪問し合い、和解の儀式（ココナッツの枝や葉で作ったオブジェの周りで和解の誓いを共に述べた後、抱き合う儀式）を行い、ケイ・アイランドではいち早く双方の和解が実現した。1999 年後も別の島で宗教対立が起こり、ケイ・アイランドでも宗教対立をおこそうとする扇動者によるデマがいくつかあったが、デマや悪いうわさを聞いたとき、まず Cultural Council に報告するというシステムが確立されているため、ケイ・アイランドでは 1999 年後、1 度も宗教間の対立は起こっていない。

ケイ・アイランドで和解がいち早く実現した理由は、①人々が平和(和解)を強くもとめていたこと、②コミュニティ中心のチームがすでに存在していて、彼らが行動を起こしたこと、

③ケイ・アイランドにある伝統的な慣習が、現地 NGO のファシリテーションによって、1999 年の紛争以前に復活し機能していたこと、があげられる。

問題への解決策は当事者であるコミュニティからでてこないと長続きしないことがマルクのケイ・アイランドの事例から学ぶことができる。

質疑応答

Q: コミュニティのニーズを捉えるコツは？

A: すでにそのコミュニティと一緒に活動した経験のある現地・国際 NGO、国際機関、現地政府にインタビューをして彼らのコミュニティに対する支援実績の有無、支援実績が有る場合は、その内容などをまず聞き取り、支援に重複がないように注意する。支援実績が無い場合は、コミュニティに赴き、現地語を話せる現地スタッフを介して、コミュニティリーダーをアイデンティファイし、コミュニティリーダーにコミュニティのニーズを聞く。コミュニティリーダーからでてきたニーズが本当にコミュニティのニーズなのかどうかの判断ポイントであるが、支援対象となるコミュニティの多くはコミュニティのメンバーがお互いにずるいことをしないように見張っていることが多い（コミュニティリーダーが支援を独り占めしてなぐられたという話もよく聞く）ので、たとえばコミュニティリーダー一人から話を聞くだけでなく、リーダーがたとえば村長であった場合、村の中の集落ごとにいる集落長も同席するなどして、村全体に情報が行くような配慮をするのもよいだろう。ただし、ニーズ調査の際は、「ニーズを聞いた＝村は支援をうけることができる」といった変な期待をインタビューされた側に持たせないような質問の仕方、応答をするように努力すべきである。

Q: コミュニティリーダーがだれか分からない場合、どうしたらいいか？

A: 何度か、そのコミュニティに足を運んだり、そのコミュニティと一緒に仕事をしたことのある現地・国際 NGO や現地政府関係者から話を聞くことを通して、自然とリーダーがだれか分かるようになる。

アクティビティ：

① まず、４つに折った紙が一人ひとりに配られた。

② 紙に書かれた支持に従って、各自行動を開始。

[紙に書かれた内容]

- All must sit by main doors
- All must sit by pillar
- All must sit by black board

③ 各自、それぞれの支持にしたがい、椅子をもってそれぞれの位置に座る。紙の支持により３つのグループができた。

④ 各自位置に座って数分後、紙に「All・・・」、つまり「みんなで・・・のそばに座れ」という支持ではないか、と理解する参加者がでる。「もしかしたら、他のグループを自分たちのグループのところに持ってこなければならないのではないか」という考えも出始める。

⑤ ここで、ファシリテーターの介入：「みんなで・・・のそばに座れ」と書いてあるから、自分と違うグループに座っている人を椅子ごと自分のグループに連れてくるということではないですか？となげかけてきた。この言葉に反応して、奪い取る必要があるのかという考えがほぼみんなに広がり、椅子奪いが始まった。

⑥ その数分後、参加者の 2 人が、「椅子を奪いとらず、場所が 3 つあるのだから、交渉して、数分ずつ各グループの場所に自分の椅子を持ち寄って順番で座りあえば、3 つのグループにとって Win-Win ではないかな」と提案があり、他の参加者賛同し、実行。ゲーム終了。

このゲームから何を学んだか：

- アクティビティの目的は、「紛争を体感する」こと。
- 紛争が起こった直後は、紛争下にいる人はなにがなんだかわからなくなる。少しの情報（うわさ等）でも過剰に反応してしまう。客観的に相互利益に導く方法を思いつくのは至難の業、であることを椅子のゲームを通して参加者は体感することができた。

【コメント】

Session ５を通して、コミュニティを組織化するために重要なことは、コミュニティのニーズを的確に汲み取り、ニーズ達成のためにコミュニティが何をしたらよいかコミュニティ同士が一緒に考える機会を与え、ニーズ達成のためのプロセスをファシリテートしながら、コミュニティが行動に移す手助けするのが、我々NGO の役割であることだと学んだ。

また、マルクのケイ・アイランドの成功例にあるように、現地 NGO のファシリテートにより組織されたコミュニティグループが、紛争といった不安定な状況にも打ち勝つことができたのは、双方におけるコミュニティ内のグループ形成過程において、グループ自身がオーナーシップを持ち、共通の目標のためにグループを形成した強い組織形成基盤があったからだということを学ぶことができた。

Session 6

Communication Methods
コミュニケーションの手法

【内容】

１．紛争の根本原因

紛争の原因には資源、テリトリー、アイデンティティ、エイズ（世界的な課題群）、テロリズムなどがある。紛争のルーツコーズに注目する。国内にものあらゆる形の暴力がある。日本にも対立問題がある。竹島（日韓）、北方領土（日露）、北朝鮮の核などを参加者が列挙。ファシリテーターは国内問題では部落問題、在日朝鮮人問題、アイヌ人問題などがあると指摘。また、マクロからマイクロレベルまでそれぞれの紛争がある。家庭レベルでも個人レベルでも同様である。平和教育にはネットワークが多くあり、アジアにもあるが、文化的な固有の環境もあり紛争を表に出せない文化的背景も存在する。

平和には丁寧な言葉遣いだけでは不十分である。我々の役割は紛争の火を消す消防士であるが、それだけでは不十分であり、消火後にまた火がつくので、その原因を取り除いていかなければならない。平和実現のために人権だけでは不十分で、緊急援助や開発、環境などの他分野とのリンクが平和には大切である。紛争解決において、紛争の主原因は時に貧困であり、その場合は平和のためにまず貧困問題に取り組まなければならない。

関係性の改善には態度も変える必要がある。またステレオタイプな見方も壊さなければならない。宗教、文化、アイデンティティなどは多くの紛争で核となっている問題である。日本国内での部落問題や在日朝鮮人問題は日本の単一アイデンティティや文化的背景にも原因がある問題といえる。マレーシアではマレー人、中華系、インド系の３民族があり、アイデンティティ問題が今大きな議論となっている。

２．アメリカの大司教の例え話

①緊急援助アプローチとは空腹な状態の人に魚（必要な物）を与えることである。
②開発アプローチとは魚を釣る道具（インフラ等）を与えることである。
③コミュニティ・アプローチは魚を取る方法や道具の維持管理する方法を教えることである。しかしその方法は長い時間がかかるので、コミュニティに住み、通常は教育アプローチを取る。
④権利アプローチはどうして湖に魚がいなくなったのか問うことである。開発や環境汚染や紛争などで失われたことを指摘して問題点にタックルすることである。

どのアプローチからすべきとは言わないが、すべてを一つのパッケージとして与えないといけない。魚を与えるだけでなく、それと同時にどうして取るのか、誰が取っているのか、誰が湖やそこに流れる川の管理をしているのか、釣った魚と同時に大きい全体構造も教えることが大切。

ラテンアメリカの大司教ドンハザカマラの有名な言葉、「その日に食べる魚を与えることより、一生食べていける魚の取り方を教えることが大切」。

３．参加型のスタイル

平和教育のワークショップでは、知識を教えること以上に参加者自身に考えさせ、意見を引き出し、本人に気づかせることが重要。ゆえにすべてを初めから教えないこと。人々にファシリテーターが質問をするスタイルが平和教育である。しかし紛争のあるコミュニティに入ると、通常人々は怒っているから、クリエイティブなアプローチを取る。たとえば、参加型のゲームやビデオ資料、写真などを使い、彼らが自身の中から反応していくアプローチを心がけること。よって平和教育ではこちらが用意した正解を与えるような処方箋的な活動をしてはいけない。彼らに何ができるか、何がベストな方法か考える機会を作ることが要である。さらにできるかぎりローカルなその土地の方法を取り入れ活用すること。コミュニティの人々を集めて話す機会は直接的な方法と、他の会合の一部として行なう間接的な方法がある。平和教育のキャパシティを与えるファシリテーターは、普段から対象コミュニティの現在の状況を把握し、コミュニティについての学習を怠らないことも大切。

４．全員参加のゲーム
全員輪になり、ボムと指されたら、右の人がアイヨ、左の人がアヤと言う。

５．ゲーム後の解説
ゲームは通常間違えた人が罰を受けてゲームの外に出る、ゆえにゲームは人々が他の参加者に勝って一番になろうとする闘争心が生み出される効果がある。しかし平和教育のゲームは違うタイプのもので、間違って失敗しても罰を与えず、そのまま一緒に活動を続ける。平和のメッセージは言葉意外のすべてを含めるものである。ゲームも同様で、誰かを排除し勝敗を出すのではなく、全員が参加し一緒に協力する雰囲気を醸成することが大切。紛争あるコミュニティで勝敗あるゲームをすると逆に対立を助長する。ファシリテーターは常に内容が平和につながるものか、すべての活動をチェックすること。ワークショップに参加した人がゲームでも敗者を味わうのではなく、何か他の参加者と一緒に楽しみ共有できるものとすること。平和教育でのゲームは平和的なことや状態の価値を自然に認識させ、意識変化を促すことである。また、それぞれのアイデンティティに固まっている人々の心を開かせるきっかけにもなる。ゲームの後は現実の問題とゲームの内容をリンクさせて意味付けを行なうことが望ましい。
また、アクティビティには女性の参加が重要である。現実社会の平和でも中心的な担い手は女性達であり、ゆえに平和教育ではピースメーカーになる女性にもっと焦点を当てて、内容にも加えるべきである。

６．議論
２分間、今の内容についてのそれぞれの意見を隣の参加者と話す。

７．ワークショップにおける女性の役割の例
マレーシアのある少数民族はダム建設により強制移住させられる可能性があった。そこでワークショップを開催すると最初は男性だけが発言し女性は参加できないか、参加しても意味がないという男性が多かった。最終的に女性だけの会合を持った結果、生活に密着した様々な意見が出され、ダムによる生活環境への問題点が具体的に列挙されて、ダム反対の根拠が女性参加によってはじめて完成したのだった。

８．文章朗読
ファシリテーターによる、憲法の中に位置づけられる福祉の意味についての文章朗読。5 分間。参加者は静聴。
その後、朗読内容についての意見を求める。参加者は難解な内容を理解していなかった。文章の一方的な読み上げは、参加者を念頭においておらず、参加者に疎外感を与えるという感想。これは上から教え、パワーギャップを感じさせるもので、賢い者が無知な者に情報を与えるスタイルである。相手を飽きさせ、不快にさせ、怒らせることが多い。ファシリテーターとは常にパワーギャップを無くさせ、メンバーに積極的な参加をさせるのが仕事である。ファシリテーターは参加者が内容を学ぶこと以上にいかに参加させるかに最も苦心するものである。文章をただ読み上げるのはファシリテーションに良くない方法といえる。相手に平和的価値を説得するのは権威的に知識を与えることではなく、本人が参加し経験から気づかせることである。参加をさせるには、ファシリテーターは自分のどんな発言に対しても意見があれば自由に述べてもらい、また間違いがある場合は指摘してもらうスタンスが重要。つまりこの場に参加している人間はすべてが平等であるという設定やメッセージが大切。
ファシリテーターとは文章などの内容知識を伝えることが仕事ではない、ファシリテーターの役割はそれらを題材として、参加者がどう思ったか、どう感じたか、どう考えるか意見を引き出し、話し合っていくことである。ファシリテーターは参加者それぞれの心の内側から「スパーク」を起こさせる、それを「プロボーク」する技術が要である。いかに対象とするコミュニティ内が気持ちよく自主的に変化をさせていくかが課題となる。

Session 7 Methods of Participatory Facilitation
参加型ファシリテーションの手法

【ねらい】
ファシリテーターの実演を見て、真の参加型ファシリテーションを学ぶ

【内容】
1．ショートエクササイズ
① WTO（世界貿易機構）の世界や人々への影響についての意見をポストイットに記入し、フリップチャートに貼る。青いポストイット：ポジティブな意見；黄色いポストイット：ネガティブな意見；ピンクのポストイット：中立。参加者は個別にポストイットに記入し、それぞれフリップチャートに貼っていく。

② ファシリテーターがフリップチャートに貼られたポストイットの中身を読み上げる。ネガティブなポストイットの方が多いが、ファシリテーターの論調は親 WTO 的。
例）「ネガティブな意見が多いけれども、WTO のよい役割として何がありますか？」
「貿易のあり方を公正にしているという側面がありますよね」
「国際的な制度をどのように利用していくか再度考えてみましょう」

2．ディスカッション
①上記エクササイズを行って、感じたこと
- 先ほどやった、ただ本を読むエクササイズよりはよい。
- 参加者がトピックを選べない。誰のイシュー？
- 平和教育とあまり関連性のないトピック。
- ポストイットが 3 色あったから、無理やりでも最低一つそれぞれの意見を書かないといけないと思った。
- 書かないといけないからストレスフル。

- WTO の良いところもあるし、悪いところもあるが、何なのか？意図が不明。
- WTO にはあまり興味がない。
- 時間の無駄。
- ポジティブな方向にリードしているように思えた。

②ファシリテーターとしてどうだったか？
- 偏見があった。
- 一見、参加型のようだけれど、参加者はこのエクササイズの主体的な役割を担っていない。
- ネガティブな意見の方が多かったのに、それには時間を割かず、ポジティブに導こうとしていた。

３．まとめ
- 穏やかに、優しく話していても、隠れたアジェンダがある場合がある。
- 参加者から意見が出ているのに、ファシリテーターの視点で導いてしまうことがある。
- 最終的なメッセージが、ファシリテーターの側から来ることがある。
- ファシリテーターは実際かなりの裁量をもっており、影響力のある立場である。
- ファシリテーターは学習を最大化するためにファシリテートしている。
- ファシリテーターの視点は持っているが、押し付けることはしない。

【感想】

エクササイズを体験して、その感情をシェアする、そこから考えを導くというワークショップの手法を実際に用いた方法は、大変参考になった。初めはとても不可解な状況におかれ、なぜ WTO なのか、なんでこんなことをするのか、ファシリテーターはどうして WTO の良い面ばかりを話すのか、という疑問がたくさん浮かんできたが、それもファシリテーターの狙いのひとつで、最後の落としどころでは皆の活発な意見交換ができた。

実際、ワークショップを行うときは、参加者に学んでほしいことを主催者が用意してしまうことが多いと改めて感じた。具体的で中立なスキルを学ぶようなワークショップならまだよいかもしれないが、紛争解決や平和教育、または前回のワークショップのテーマであったような心のケアといったセンシティブな問題は、主催者やファシリテーターがある方向に誘導することは大変危険であり、参加者ひとりひとりの経験や感情に向き合い、柔軟にファシリテートしていくスキルが必要だろうと痛感した。

一見参加型の手法を用いているように見えて、まったく参加型でない、ということや、ファシリテーターのアジェンダに導いてしまう、ということは、無意識にも行ってしまうかもしれない。このセッションを通じて、ファシリテーターは影響力のあるポジションであること、また、参加型“手法”に満足せず、本質を見ること、といった大事な点を学んだ。

Session 8

Communication Skills for Effective Facilitation
効果的なファシリテーションのためのコミュニケーションスキル

【ねらい】
１．効果的なファシリテーションの為のコミュニケーションスキルを学ぶ
２．写真を使ったコミュニケーションスキルを学ぶ

【内容】
１．効果的なファシリテーションの為のコミュニケーションスキル
コミュニケーションというものは、通常ある一定の‘環境’の中で行われる。これは、1 人のファシリテーター対複数の参加者といったワークショップのファシリテーションにおいても同様である。‘環境’を作り出す要素としては以下のものが挙げられる。

- 場所
- 時間
- 情況
- 秩序
- 音（騒音・雑音を含む）

上記の‘環境’を作りだす要素は、効果的なコミュニケーションに障害をもたらす場合がある。ファシリテーターは、そういった障害のある‘環境’の中でもコミュニケーションの参加者と効果的に‘対話’をするスキルを養うことが大切である。

例）トラウマを抱える子どもたちを対象に心理社会活動を行う場合：
活動中、子どもたちは表面的にはトラウマを抱えていないように見えるかも知れない。しかし、活動に参加しながら実はトラウマのことを考えている可能性もある。この場合、ファシリテーターとしては、子どもたちが置かれているコンテクスト（情況、前後関係）を念頭に、子どもたちが発する言葉や行動はそのコンテクストに置いてどの様な意味を持つのか、何か抜け落ちているものはないか、考慮してコミュニケーションを図ることが重要である。
「距離」というものも効果的なコミュニケーションにおいて重要な意味を持つ。コミュニケーションの相手との「距離」の取り方によって、相手が‘対話’に参加することを妨げてしまうこともある。ここで言う「距離」は物理的なものだけでなく、心理的なものも含む。その為、コミュニケーションを図ろうとする相手との「信頼」や「関係」といったものが重要になってくる。

２．写真を使ったコミュニケーションスキル
効果的且つ活発なコミュニケーションを促進するために、ファシリテーターは創造的な手段を活用することが大切である。コミュニケーションの参加者は一様ではないので、参加者のダイナミクスに合わせた創造的アプローチを採るころが望まれる。写真を使ったコミュニケーションスキルは、その様な創造的アプローチの一つである。
適切なものを選択すれば、写真は活発なコミュニケーションを促すツールとして活躍してくれる。例えば、以下のような写真は活発な‘ディスカッション’を促し、コミュニケーションを活性化してくれる。

- 浜辺に座るアフリカ系男性。その傍には、人種によって浜辺への立ち入りを制限する看板が掲げられている。
- ジョージ・W・ブッシュとオサマ・ビン・ラディンのイメージを組み合わせて作った写真。

以下の様な写真はメッセージ性が薄く対象もあいまいなので、活発なコミュニケーションを促進するツールとはなりにくい。

- ４－５人のパネリストが写っているセミナーの写真。何のセミナーか写真からは全く読み取れない。
- 多くのムスリムがメッカに集まり礼拝している様子。

【コメント】

「距離」というものがコミュニケーションに与える影響を興味深く聞いた。物理的「距離」というものは特に文化・社会に相対的で、日本人はコミュニケーションの際に、この「距離」を比較的大きく取る方であると思う。日本では心地よい「距離」でも、他の文化・社会では心地よくない、コミュニケーション参加に興味がないと思われてしまう危険性もある。ワークショップを含めた広義のコミュニケーションというものを他の文化圏、社会で行う際に、念頭に置くべき重要な点であると思った。

写真をツールとしてコミュニケーション促進に活用するのは、非常にいい案であると思う。写真というのは、携帯に便利な為、どんな場面でも活用できるからだ。但し、ツールとして写真を選択する際には、議論をかもし出す写真なら何でもいいという訳ではなく、倫理に適った、写真を見ることになる参加者の文化・社会的背景をある程度考慮したものを選択する必要があると考える。

Session 9

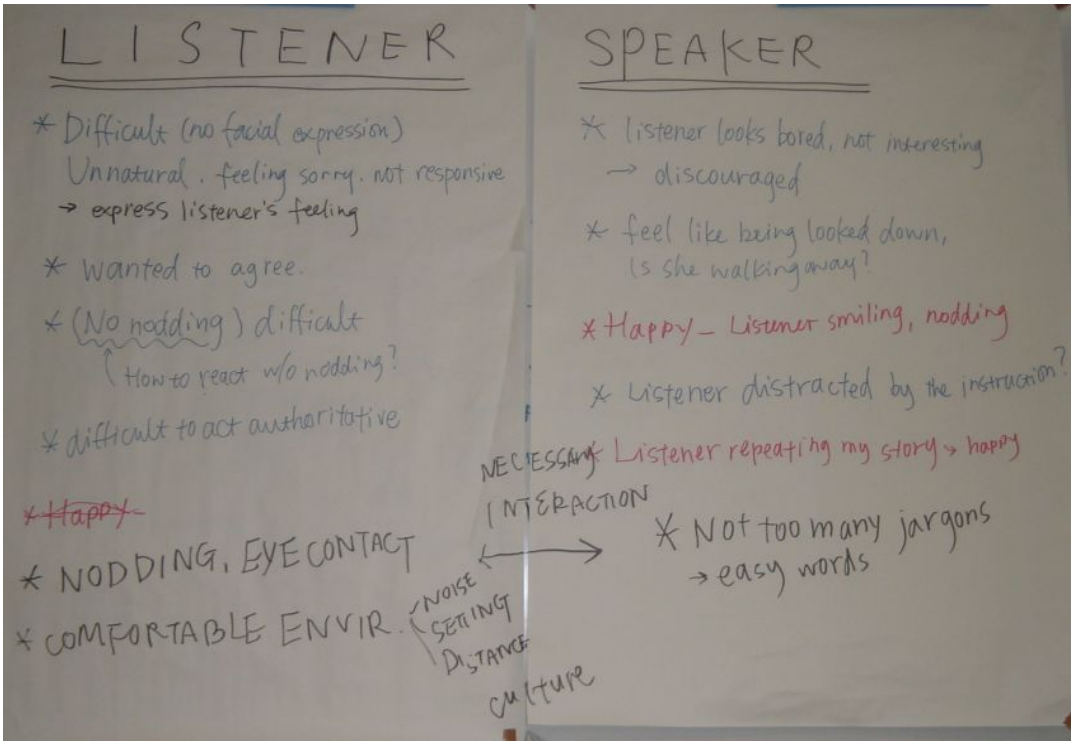
Simulation Exercises 1
ファシリテーションの演習 1

【テーマ】
実際にグループでねらい、目的、手法を検討し、ワークショップの作成を行ない、発表まで行なう。

【ねらい】
- 平和教育に関するプログラム（ワークショップ）を作成するにあたり、新しい挑戦、ワークショップの手法やプロセスを学ぶ
- チームによるプログラム作成を学びあう
- 限られた時間の中で発表し、互いの学びを共有する

【内容】
9:30－10:30　昨日分かれた 4 グループに別れ、ワークショップの模擬を作る
10:40－11:10　グループ発表
グループ 1 発表「コミュニケーションについて―紛争予防（衝突の予防）のために―　」
ワークショップ内容：2 名一組のパートナーになり、聞き役、話し役に分かれて、ファシリテーターの指示に従い、互いにコミュニケーション（簡単な会話）を行なう。
指示の中身
- 目は合わさない
- 偉そうな態度で聞く
- 無表情で聞く
- 笑顔で相槌を打つ
- 質問をしてはいけない
- 反論しながら聞く

上記のように、コミュニケーションを行なう際に必要不可欠（作成チームの意図による）な要素を意図的に操作することにより、何気ない会話から他者との会話や関係性について考えることが出来るという内容であった。
ワークショップ終了後
参加者それぞれから感想、疑問、質疑応答が交わされた。



【コメント】

ワークショップを作成する、案をだすという作業は参加者がそれぞれの現場で行なっていると思うが、異なる組織の方々と短時間の間に始まりから終わりまで組み立てるのは簡単なことではないと感じた。しかし前半の学びをより深いものにする意味でも、実習を行なうのは大変有意義なものであると感じた。そのプロセスそのものが、平和教育・紛争予防に繋がる一歩なのではないかとつくづく感じた。

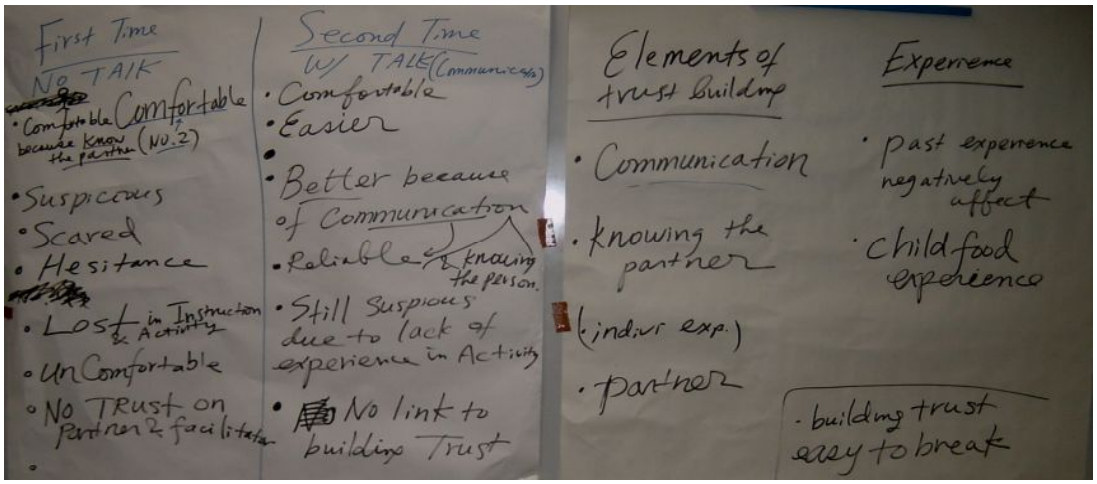
Session 10

Simulation Exercises 2
ファシリテーションの演習 2

【テーマ】
ワークショップのファシリテーションをシミュレーションする

【ねらい】
これまで学んだことを活かし、ファシリテーションを行ってみることで、それぞれのポイント（目的、インストラクション、ツール、プロセッシング、まとめ）を確認し合う。

【内容】
グループ２より、信頼に関するワークショップを３０分行った。
１．参加者の半分が、まず一列にならぶ。
２．目をつぶり、手を組む（クロスさせ肩に手をあてる）というインストラクションがあった。
３．残りの半分の参加者がそれぞれの目を隠している人の後ろに一人ずつ並ぶ。
４．無言のままで、後ろ人が肩をたたくと、目をつぶっている人が後ろにいる人にむかって倒れるというインストラクションがある。
５．肩をたたいて、目をつぶっている人が倒れる。後ろの人は支える。
６．終わって少し話す時間をもった。
７．再度、今度は声を掛け合いながら行うようにインストラクションがあり、声を掛け合いながら、それぞれのペアーが行う。
８．終了したら、席にペアーで座った。



【コメント】
実際にやってみたことは非常に面白い体験となった。企画の段階から含め、すべての瞬間、役割が重要だということがよく分かった。多くのポイントがあり、一つの簡単そうなワークであってもやってみると難しく、特にインストラクション、プロセッシングはワークを活かすためにも重要である。「参加型」ということが言われる中、参加者の言葉を引き出し、聞き、利用し、進めていくということを、調査、トレーニングなど、ワークショップやミーティングにおいて、取り入れていけるように、技術を身につけていくことが必要だと思った。

Session 11 Fine Tuning Facilitation
より良いファシリテーションに向けて

【テーマ】
ワークショップのシミュレーショントレーニング～ファシリテーションの改善

【ねらい】
午前中に行なわれた 2 グループによるファシリテーション･ワークショップの実演に引き続いて、残り 2 グループによるワークショップが行なわれた。グループワークによるシュミレーションにより、ファシリテーションの実際を経験し、改善点の検討を行なうのがこの研修の狙いであった。

【内容】
グループ３：女子教育ワークショップ
想定：
ヒンドゥー教国の村。NGO が女子教育の重要性を地域住民、特に母親を対象に娘を学校に行かせる重要性を周知してもらうためのワークショップ。

シュミレーションの内容：
集まってもらった母親たちも文字の読み書きができないことを想定。場面 1 にて 2 枚の絵を見せて、1）子どもたちに与えるのに最適な食事のメニューを選ばせ、2）下痢をしている子どもへの経口補水に水と温湯のどちらが適当であるか選ばせた。これを通して知識の重要性を訴えることを狙った。
　場面 2 では前段を受けて、学校に子どもを通わせる必要性の認識を問い、母親たちの意見聴取を行なった。

講師のコメントや反省点：
　状況設定と場面 1 でのシンプルな質問設定は効果的で良かった。ただし、場面 2 につなげて話を発展させる段階で、ファシリテーターを演じたグループの質問のレベルに統一が取れておらず、テーマが大きすぎる質問になったり、聴衆の反応が鈍い場合に質問をいくつも重ねる結果になり、焦点がぼける結果になった。
　この点については、講師より、質問の流れを整理すること、質問同士の関連性を取ることなどの改善点が示唆された。
　ファシリテーションを実施するグループのチームワークの問題も講師より指摘を受けた。
例えば、メイン司会のファシリテーターが司会進行に詰まった場合の改善方法として、他のファシリテーターが時間稼ぎのための助け舟を出すなどのテクニックが紹介された。

グループ４：平和教育 NGO による紛争解決ワークショップ
想定：　対象者を小学校 5 年生と想定。クラスでのグループワーク。

シュミレーションの内容：
いったん 1 つの輪を作って集まってもらい。目を閉じている間に、ひとりひとりの背中にシンボルマーク（色のついた点）のついたシールを貼る。目を開けた後、ファシリテーターは「友達を作るように」との指示だけを出す（質問は受け付けない）。グループ作りをした後に、場面 2 として、そのグループごとに集まり、感想を話し合い、それを最後に全体グループに持ち寄って発表した。ファシリテーターからの指示があったわけではないが、参加者は、自然に同じマーク同士を「友達」と認識してグループ作りをする結果になった。

講師のコメントや反省点：
シンボルマークは「宗教」「人種」「肌の色」などの象徴的な意味を表し、参加者がそれらのラベルによって無意識に仲間分けをしていることに気づくことを狙ったワークショップ。
実施の段階でひとりグループが出来てしまい、そのひとりグループの対象者が泣き出してしまったことから予想外の展開になった。（実際のワークショップでも起こり得ること）
ファシリテーターグループがこの対応に追われたこともあって、グループが 2 つに分かれてしまい、シュミレーションを統一性をもって最後まで実施する一貫性が失われた。
ファシリテーターの責任として、本題の方が継続していることを明確にする必要があった。
また、参加者に対して場面 1 と場面 2 の切り替えや、小学生という設定がどの時点まで継続したのか、シュミレーションの終了のアナウンスが不明確だったとの講師の指摘があった。
いったんグループ作りをした後の、グループ内討論の段階で、各グループにファシリテーターグループから一人ずつ加わり、議論を助けるスタイルを取ったのは、グループワークを促進させるために効果的だった。しかし、最終討議の段階で、ファシリテーターが用意していた結論に持ち込んだこと、ポジティブな発言もあった中でわざわざネガティブな要素を含む結論（人種などによるラベル張りの問題）に誘導したことに改善の余地があるとの指摘も受けた。

【感想・コメント】
今回の研修プログラム全体を通じて、座学よりもむしろ実際に頭と体を動かして体験してみる中から学びがあり、改善点を汲み取る構成になっていて、プログラムの学習効果が実感できた。特にこの 3 日目のファシリーテーションのシュミレーションは正にその中でも最初の 2 日間の学びを実践の中で試すと言う意味で集大成的な体験となった。
単独のファシリテータとしての技量を磨く上でも勉強になったが、グループワークを通して、ファシリテーションの中でも指導者同士のコミュニケーションや協力が大切であることが実感された。NGO の行なう平和教育は、支援先のコミュニティーを取りまとめて行くこと、現地の力を生かすことであるとする定義が、ファシリテーションのための作業を行なう中でも実感することができ貴重な経験となった。

Session 12 Summary and Closing
まとめと閉会

【内容】

1. 参加者よりファシリテーターをする際、難しいと思われることを参加者より 2〜3 点挙げた。主な意見は以下の通り。

・ クリエイティブな方法で実施すること。
・ 参加者が無反応な時/予期しない反応や回答があった時。
・ 参加者をリラックスさせること/友好的な雰囲気を作ること。
・ アクティビティが適しているか否か。
・ 通訳に潜む危険性（バイアスなど)。
・ 参加者へ中立的で、彼らの意見によって進めつつも、メッセージや目的を伝えること。

2. ファシリテーターより、フィールドの仕事において、コミュニティと関係を構築し→文化や地域など背景の特性の把握し→コミュニティと働く、という流れの中で、全ての点においてコミュニティの人々を中心においたファシリテーション

3. このワークショップで得たものをいかに各自の団体に持ち帰り、活用するか、また今回のワークショップの感想を各自が述べてワークショップのラップアップとなった。以下のような意見が各参加者より聞かれた。

・人々の力とコミュニティの声の重要性を認識した。
・よいファシリテーターになるのは非常に難しいことを認識した。
・フィールドで活用したい。

4. 修了証を参加者同士で授与し合い、３日間のワークショップを終了した。

【コメント】

３日間、ファシリテーターに必要とされる要素や具体的なアクティビティの紹介等があったが、参加者が共通して感じたことは、コミュニティをベースとしたファシリテーターの重要性と同時に、実際のフィールドにおいて実践していく際の難しさであったように思う。ファシリテーターに関する知識や技術を習得しておくことが重要である一方、フィールドにおいてファシリテーターとして実践していく中で、地域コミュニティからファシリテーターが学んでいくことが不可欠であり、そのプロセスの中でワークショップにあった‘Good Facilitator’となっていくことを痛感させられるワークショップであった。

ワークショップの効果についての質問紙調査の結果

（教育協力 NGO ネットワーク事務局長　三宅隆史）

今回のワークショップの効果について、ワークショップを通じて参加者の能力（知識、技能、態度）に変容が見られると想定される 10 項目をワークショップの目的に沿って選定し、調査を実施した。ワークショップの事前（開会の前）と事後（閉会の後）において、項目毎に 5 件法（4 点満点）で参加者の自己評定による回答を求めた。次に、事前調査と事後調査の平均値を比較して、ワークショップの効果を分析した。

5 件法とは、「きわめてあてはまる」から「あてはまらない」までを 5 段階にわけて、該当する段階に○をつけるものである。今回は、「きわめてあてはまる」を 4 点、「かなりあてはまる」を３点，「わりとあてはまる」を 2 点，「少しあてはまる」を 1 点，「あてはまらない」を 0 点として得点化した。また，事前・事後の差が有意であるかどうかを対応のある t 検定を用いて検定した。

ｔ検定とは，事前と事後の平均値の差が，誤差の範囲の変化であるか，それ以上の変化であるかを確かめる統計手法である。その差が誤差の範囲を超える大きい効果と認められた場合には t 値と有意水準（＊＊は1%水準，＊は5%水準で有意）を表に記し，誤差の範囲であまり変化が見られなかった場合は「n. s. 」（有意ではないの意味）と記した。「1%水準で有意である」とは，本当は「有意でない」のに「有意である」として間違う確率が1%未満（100回に1回未満）であることを表す。

分析に入る前に参加者の特徴を紹介しておく。有効回答数は22であった。開発協力、人道援助分野での従事経験年数の平均値は、5.0年、中間値は3.0年で比較的経験の浅い人が参加していた。回答者のうち86%にあたる19名がNGO職員であった。災害後の心のケアについてのワークショップ・研修を以前受けたことがある人は36%にあたる8名だった。

では，ワークショップを通して参加者にどのような変化が見られたかを考察する。最も変容が大きかった項目は、⑩「ポピュラーエジュケーションの原則を知っている」であり、2.1 点の増加があった。次に変容が大きかった項目は、⑧「良いファシリテーターの特徴とは何かを知っている」で、1.5 点増加した。これはともに、平和・紛争予防教育活動の原則やファシリテーター（進行役）の備えるべき資質といった知識レベルの向上においてワークショップの効果が高かったことを示している。

3 番前に変容が大きかった項目は、⑥「ファシリテーターのツール・手法を知っている」と⑨「ワークショップの進行役として自信がある」であった。参加者がファシリテーターに必要な技能を修得し、自信をもつようになったと考えられる。

次に、④「コミュニティーをエンパワーするために参加型学習を取り入れる方法を知っている」、⑦「教育の要素を災害復興事業に取り入れる方法を知っている」について参加者の変容が見られた。ワークショップに参加する前は、災害復興時に教育事業を統合するための方法論を知らなかったが、ワークショップを通じて参加者はこれを習得したと考えられる。

項目①「自分は創造的だ」と②「参加者からでた多様な意見を統合、まとめることができる」は、統計的に有意な変容が見られなかった。これらの項目は、平和・紛争予防教育におけるファシリテーターに求められる態度レベルの資質である。態度レベルの改善は、3 日間のワークショップでは達成することが難しいと考えられる。このレベルの改善は、実際に平和・紛争予防教育のワークショップのファシリテーターの経験を積み重ね、失敗から学ぶことを通じて達成されるものなのであろう。

結論として、この調査結果によって、 (1)災害復興時のあらゆる分野・セクターの支援事業に平和・紛争予防教育のプログラムを取り入れるための能力を高める、(2)平和・紛争予防教育プログラムのファシリテーターに必要な知識、技能を修得する、というワークショップの所期の目的

は、概ね達成されたと考えられる。

参加者の能力（知識や技能）の変容についての質問紙調査結果　（４点満点）

	事前調査			事後調査			平均値の変化分	t 値
	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差		
①　自分は創造的だ	22	1.7	0.8	22	1.9	0.8	0.2	n.s.
②　参加者からでた多様な意見を統合、まとめることができる	21	1.6	0.9	22	1.8	0.9	0.2	n.s.
③　参加者を楽しませ、活発に参加させる活動をファシリテートできる	22	1.4	1.0	22	1.9	0.8	0.5	3.2**
④　コミュニティーをエンパワーするために参加型学習を取り入れる方法を知っている	22	1.5	0.9	21	2.5	0.7	1.0	4.5**
⑤　自分は参加型のファシリテーターである。	22	1.3	1.1	22	2.0	1.0	0.7	4.5**
⑥　ファシリテーターのツール・手法を知っている	22	1.3	0.9	22	2.5	0.7	1.1	5.1**
⑦　教育の要素を災害復興事業に取り入れる方法を知っている	22	1.2	1.0	22	2.0	1.0	0.8	5.9**
⑧　良いファシリテーターの特徴とは何かを知っている	22	1.5	1.0	22	3.0	0.7	1.5	6.2**
⑨　ワークショップの進行役として自信がある	22	0.8	0.8	22	1.9	0.8	1.1	6.9**
⑩　ポピュラーエジュケーションの原則を知っている	22	0.3	0.6	22	2.4	1.0	2.1	5000000**

**:1%未満（両側）で統計的に有意、n.s.：統計的に有意ではない

2006 年度 NGO 活動環境整備支援事業
災害復興に関する NGO 研究会報告書

『平和教育・紛争予防教育ワークショップ』

2007 年 3 月発行

発行：外務省国際協力局民間援助連携室
〒100-8919　東京都千代田区霞ヶ関 2-2-1
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/index/kaikaku/oda_ngo.html

実施：教育協力 NGO ネットワーク（JNNE）
［事務局］（社）シャンティ国際ボランティア会(SVA)
三宅隆史、伊藤解子、海藤純子（インターン）
〒160-0015　東京都新宿区大京町 31　慈母会館
http://jnne.org/